

アーバニズム・プレイス展 2018 の展示デザインと来場者評価傾向

DESIGN AND VISITORS' EVALUATION OF URBANISM PLACES EXHIBITION 2018

中島直人 — * 1 永野真義 — * 2
杉崎和久 — * 3 中野 卓 — * 4
園田 聡 — * 5 高野哲矢 — * 6
長谷川隆三 — * 7 湯澤晶子 — * 8

Naoto NAKAJIMA — * 1 Masayoshi NAGANO — * 2
Kazuhisa SUGISAKI — * 3 Taku NAKANO — * 4
Satoshi SONODA — * 5 Tetsuya TAKANO — * 6
Ryuzo HASEGAWA — * 7 Shoko YUZAWA — * 8

キーワード：

都市計画展覧会, 都市計画史, 都市計画遺産, 新宿,
プレイスメイキング

Keywords:

Planning exhibition, Planning history, Planning heritage, Shinjuku,
Place-making

Urbanism Places Exhibition 2018 was held at 55HIROBA of the Shinjuku Mitsui Building in September 2018. The central concept raised by the exhibition on urban-planning-based public spaces was “planning heritage as real place”. The exhibition consisted of 4 thematic programs, which had a common principle not to disturb day-to-day activities in the planning heritage place. On the other hand, the exhibition itself was expected to derive public space functions and possibilities. The visitors' evaluation made clear challenges on the balance between the conceptual pursuit and the visitors' satisfaction as well as the differences of the evaluation between experts and non-experts.

1. はじめに

2018年9月15日から23日にかけて、新宿三井ビルディングにて「アーバニズム・プレイス展 2018 都市計画の過去と未来の創庫」(以下、UPE2018と表記する)を開催した¹⁾。都市計画法制定100年、全面改正50年を記念して、都市計画が生み出してきた都市空間という視点からこれまでの都市計画の歩みを整理すると同時に、これからの都市計画を展望しようという目的で企画したものである。建築・都市計画の専門家だけでなく、幅広い層に向けて都市計画が果たしてきた役割を伝えるための展覧会という位置づけであった。これまで世界各地で都市計画に関する様々な展覧会が開催されてきた。とりわけ、近年、日本では高度経済成長期に計画・整備されたニュータウンが建設からおよそ半世紀を迎え、更新期を迎えていることもあり、企画展「ニュータウン誕生 ～千里&多摩ニュータウンの都市計画と人々～」(パルテノン多摩歴史ミュージアム:2018年3月3日～5月27日、吹田市立博物館:2018年6月9日～7月8日)、「高蔵寺ニュータウン スケッチパネル展」(日本都市計画学会中部支部・UR都市機構、高蔵寺ニュータウン東部市民センター:2019年3月30日～3月31日)など、都市計画の歴史を題材とした展覧会が各地で開催されている。しかし、それらの殆どは都市計画史に関する図面や写真を展示室にて展示するというものである。本稿で説明するように、本展覧会は展示のコンセプトや内容、方法に関して、従来の都市計画関係の展覧会とは異なるユニークな取り組みで

あった。本稿では、今後の都市計画展覧会の方法論の発展のために、UPE2018の展示デザインの意図を整理するとともに、実際の展示に対する来場者の評価傾向を明らかにすることを目的とする。

都市計画展覧会に関する研究は、日本国内では1920年代の京都都市計画展覧会を対象に、「都市の歴史意識」について分析した秋元(2009)¹⁾が唯一であり、本稿と類似の研究は未だ行われていない。一方で、国際的にはFreestone他(2014)²⁾が先駆的かつ唯一まとまった研究成果である。欧米豪で開催された都市計画に関する展覧会を、1)市民展覧会、2)万国博覧会、3)全国・国際・帝国展覧会、4)都市計画展覧会、5)都市計画会議での展示、6)テーマ別展覧会、7)巡回展、8)デザイン・建築・住宅・福祉展覧会、7)都市展覧会・博物館に分類した上で、個別の展覧会をケースとして取り上げ、a)表現された概念やイデオロギー、b)展示方法や道具の革新性、c)主催・後援する組織・人物、d)都市計画史におけるインパクトと意義という視点から分析を行った。ただし、事例は欧米豪に限定され、かつ、歴史的な観点からの分析に留まっており、本稿とは対象事例や分析の視点が異なる。なお、UPE2018は都市計画展覧会の分類では7)にあたる。また、本稿では展覧会の展示デザインの意図の整理に関して、Freestone他(2014)²⁾が設定した分析視点a)、b)を援用する。

2. 展示で表現された概念：都市計画遺産

¹⁾ 東京大学大学院工学系研究科 准教授
(〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1)
²⁾ 東京大学大学院工学系研究科 助教
³⁾ 法政大学法学部 教授
⁴⁾ 国立研究開発法人建築研究所 研究員
⁵⁾ ㈲ハートビートプラン
⁶⁾ ㈲まちづくり小浜
⁷⁾ ㈲フロントヤード 代表取締役
⁸⁾ 東京大学大学院工学系研究科 博士課程

¹⁾ Assoc. Prof., Faculty of Eng., The Univ. of Tokyo

²⁾ Assistant Prof., Faculty of Eng., The Univ. of Tokyo

³⁾ Prof., Faculty of Law, Hosei Univ.

⁴⁾ Research Engineer, Building Research Institute

⁵⁾ Planner, Heart Beat Plan

⁶⁾ Planner, Machizukuri Obama

⁷⁾ President, FRONTYARD Co., Ltd.

⁸⁾ Doctoral Candidate, Faculty of Eng., The Univ. of Tokyo

表1 アーバニズム・プレイス展 2018 の展示内容

名称	① Great Public Places	② Shinjuku Public Place Chronicle	③ Place Making Exhibition	④ Place Talk
内容・趣旨	1919年の都市計画法制定以降に生み出された35の都市広場について、その整備背景や当時の法制度、社会状況、設計計画書等について解説する。	55HIROBAおよび新宿副都心の足元空地、そして新宿駅周辺の広場がどのようにして生み出されたのか、その経緯や書面を解説する。	都市空間ストックの活用手法としてのプレイスメイキングを、下記の都内各地の取り組みで実際に使われたファニチャーを通じて解説する ①Shinjuku Share Lounge (新宿区西新宿) ②nest marche (豊島区池袋) ③丸の内仲通りアーバンテラス (千代田区丸の内) ④高島平グリーンテラス (板橋区高島平)	展覧会の展示内容と関係の深い以下のテーマについて、ゲストとともに議論を行う。 ①9月15日 アーバニズム・プレイス・レセプション ②9月18日 新宿三井ビル・55HIROBaの誕生と再生 ③9月21日 新宿からの都心の広場論 ④9月23日 広場を牽引し都市計画へ
展示場所	新宿三井ビルディング B1階 55HIROBA	新宿三井ビルディング 2階ロビー 55HSQUAREsouth	新宿三井ビルディング 1階デッキ	新宿三井ビルディング B1階 55HIROBA
展示方法	既設テーブルにポスターを貼り、ビニールシートでコーティングする。広場の普段使いにおいて、自然と展示物が目に入るようにする。同時に、パネルと同内容の情報をInstagramでも公開し、閲覧できるようにした。	ロングテーブルの表面に年譜状のパネルを設置し、歴史資料を展示することで、ワークスペースの普段使いと共有させた。また、パナーや映像の壁面投射を補助的に行った。	デッキ上にプレイスメイキング関係のファニチャーを都内プロジェクトの解説パネルとともに設置し、デッキ上の広場化のデモンストレーションを行った。	55HIROBAのデッキ上をステージとして、広場全体に開かれたかたちで、トークを行った。
来場者	平均着席者数 43人 ・30分ごとに着席者数を確認 ・雨天時は平均値計算から除外	延べ人数 475人 ・9月15日・16日のデータは欠損	延べ人数 196人 ・9月15日・16日のデータは欠損	延べ人数 122人 ・①：19人※、②：23人、③：37人、④：43人※ ※はステージ上の人数のみカウント

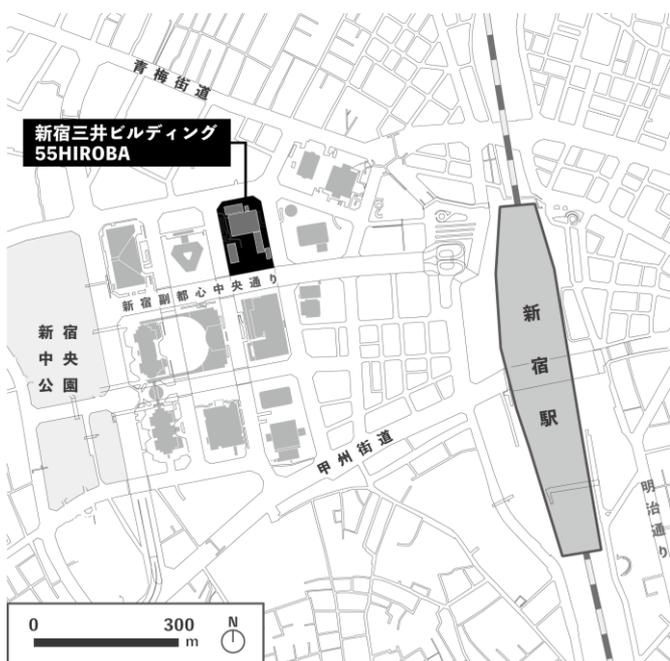


図1 アーバニズム・プレイス展 2018 の会場（新宿三井ビルディング）の位置

2.1 都市計画遺産というコンセプト

2019年は都市計画法制定100年というアニバーサリーイヤーにあたり、法制史への着目が高まっている。しかし、都市計画法制度は運用され、具体の都市空間に影響を与えることで初めて人々の生活の役に立つものである。法制度と人々の生活との間には都市空間が介在している。「我が国の近代都市計画が現在までに生み出してきたもの、そしてその中で将来に遺していくべきもの」⁽²⁾と定義される都市計画遺産は、そうした都市計画が生み出してきた都市空間を結果論的に評価する視点であり、都市計画が都市生活の豊かさにどのような貢献をしてきたのかを省察する切り口ともなりえる。UPE2018ではこの都市計画遺産という概念を展示の根幹に据えた。

また、UPE2018では、都市計画を都市計画法の規定する内容に限らず、より広義に捉えるために「アーバニズム」という言葉を掲げた。そして、人々との関わりに視点を据えて都市空間を捉えるために「プレイス」という言葉と組み合わせた。なお、UPE2018の最

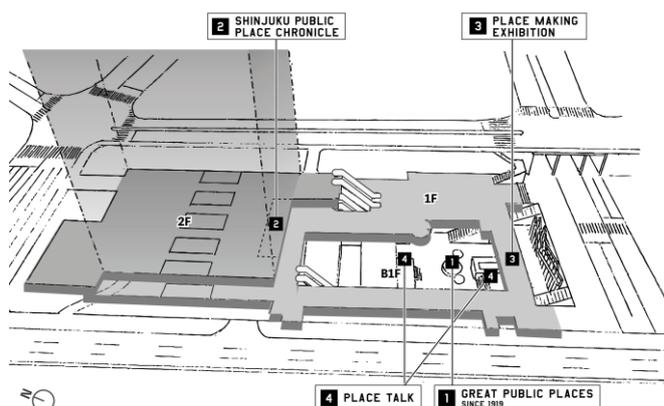


図2 アーバニズム・プレイス展 2018 の展示配置

後の「2018」は、この展覧会を一回では終わらせずに、毎年、あるいは隔年で続けていこうという意志が込められている。都市計画が生み出した人々との関わりが深い都市空間は多種多様であり、一度にそれらの全体を把握し、提示することは難しい。そのためUPE2018では、都市計画遺産のうち、テーマ、対象を広場に絞った。

2.2 都市計画遺産の体感という意図

アメリカ都市計画協会 (American Planning Association) は、他の規範となる性格、質を有する、都市計画により生み出された卓越した場所を称揚するプログラム「アメリカの偉大な場所 (Great Places in America)」を展開している⁽³⁾。複雑化し、理解が難しくなっている都市計画の現状に対して、「人々と都市計画との絆をつくる」「なぜ、その場所がよいのか。「偶然ではない」ことを知らせる」「多くの人が場所の良し悪しに関心を持つきっかけとなる」という目的で2007年に開始された取り組みである。このプログラムでは眼に見える都市空間がコミュニケーションツールとして機能することが期待されている。卓越した場所＝都市空間そのものに都市計画とは何かを語らせる、という考え方である。

UPE2018では、アメリカ都市計画協会のこの取り組みを参考にし、まず都市計画遺産自体を人々に体感してもらうことが大事であると考え、都市計画遺産と認められる場所を会場として選定することにした。具体的には、広場の創出過程における都市計画の貢献具合と現在の都市空間の質、使われ方などを勘案し、新宿西口超高層ビル

街の一角にある新宿三井ビルディング（1974年竣工、設計者：三井不動産・日本設計事務所）足元の55HIROBAを主会場とすることにした（図1、図2）。55HIROBAは特定街区制度による有効空地として提供された広場であるが、敷地内での配置計画、広場のデザイン密度の両面で高く評価されるということと同時に、広場建設後も継続的なマネジメントがなされ、現在も多くの人々に使われている都市空間である。さらに加えて、新宿西口超高層ビル街そのものが戦後都市計画の都市像を最も純粋に体現した地域であり、そのような都市像が抱える大きな課題も含めて、55HIROBAが都市計画のこれまでとこれからの議論するのに最も相応しい場であると考えたのである。この会場で表1に示した4つの展示企画を行うことになった。

3. 展示方法：日常利用の尊重と広場を生み出すプログラム

3.1 場の日常的な空間利用の中に織り込まれた展示

都市計画遺産という観点から本展覧会のメインとなるコンテンツは、都市計画がこれまでに生み出してきた広場をカタログ的に紹介する「Great Public Places since 1919」と、55HIROBAの計画・設計の意図やプロセス、さらには新宿西口超高層ビル街や新宿駅周辺での広場形成の歴史的展開を伝える「Shinjuku Public Place Chronicle」であった。前者は1919年の都市計画法制定以降に生み

表2 Great Public Places since 1919で展示した広場リスト

	広場名	所在地
戦前期 1919年～	上野駅前広場	東京都台東区
	泉広場	東京都千代田区
	湊橋橋詰広場	東京都中央区
	アメリカ村三角公園	大阪府大阪市
	大須ふれあい広場	愛知県名古屋市
	田園調布駅前広場	東京都大田区
	さくら町会辻広場	東京都杉並区
	静岡青葉通り	静岡県静岡市
戦災復興期 1945年～	歌舞伎町シネシティ広場	東京都新宿区
	パティオ十番	東京都港区
	隅切り（早稲田）	東京都新宿区
	長岡まいまい広場	新潟県長岡市
高度成長期 1960年～	新宿駅西口広場	東京都新宿区
	柏駅東口ダブルデッキ	千葉県柏市
	ハゼの木広場	神奈川県藤沢市
	コピス吉祥寺屋上庭園	東京都武蔵野市
	千里中央 セルシー前広場	大阪府豊中市
	金沢シーサイドタウンセンター	神奈川県横浜市
	新宿三井55広場	東京都新宿区
	銀座通り歩行者天国	東京都中央区
	平和通買物公園	北海道旭川市
	遊戯道路	全国各地
安定成長期 1980年～	横浜市の都市デザイン	神奈川県横浜市
	世田谷区の都市デザイン	東京都世田谷区
	高山 まちかどスポット	岐阜県高山市
	恵比寿ガーデンプレイスセンター広場	東京都渋谷区
成熟期 2000年～	丸亀町商店街 壱番街前ドーム広場	香川県高松市
	道後温泉広場	愛媛県松山市
	新宿モア4番街	東京都新宿区
	富山グランドプラザ	富山県富山市
	京橋川・元安川沿いオープンカフェ	広島県広島市
	横浜みなとみらい21 公共空間	神奈川県横浜市
南池袋公園	東京都豊島区	
水上公園	福岡県福岡市	



図3 Great Public Places since 1919の展示ポスター例



写真1 Great Public Places since 1919の展示風景

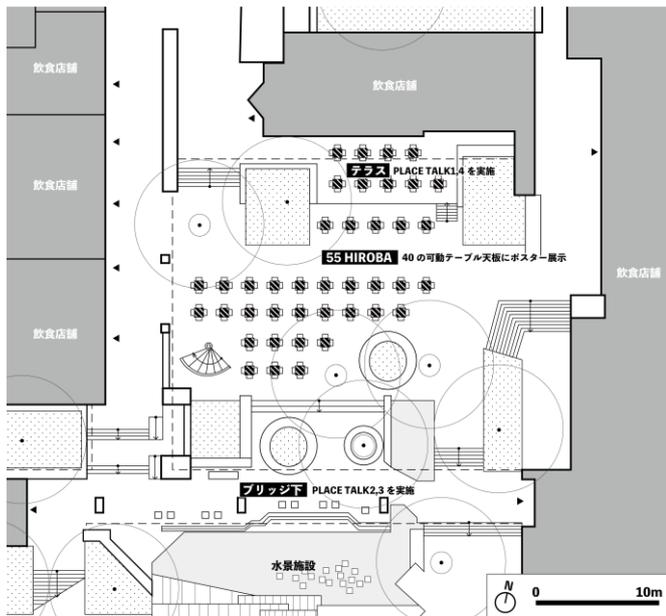


図4 55HIROBA 内の展示配置

出された全国の広場 35 事例 (表 2) について、現状の写真、設計・計画当時の図面・写真をメインに、その整備背景や当時の法制度・社会状況、設計・計画の意図についての解説文を付したポスターを用意した (図 3)。後者は 55HIROBA および新宿副都心に関する歴史的な資料の複製や現物を時系列に整理したパネルと、設計者へのインタビュー記録映像をコンテンツとして用意した。

これらをどのように展示するのか、特に都市計画遺産の体感を会場選定の軸としたゆえに、展示そのものがその都市空間の日常的なありようを変えてしまう可能性があるという事態にどう対処するのが、展示デザイン上の課題となった。UPE2018 では、展示デザインのコンセプトを、その場の日常的な空間利用の中に展示物を自

然なかたちで織り込むこととした。具体的には、「Great Public Places since 1919」では、広場に既設のテーブルを展示台として利用することにした。55HIROBA には通常、41 組の方形のテーブルとイスが整列して並べられていたが、そのテーブルの配置はそのままにして、テーブルの表面にポスターを貼り付け、透明のビニルシートでコーティングすることで、テーブル利用者の目にそのポスターが自然と入ってくるようにした (写真 1、図 4)。ただし、各テーブルの利用者以外にはポスターを見るのが難しくなることが予想されたため、ポスターのコンテンツはすべて Instagram にアップし、会場各所に掲示した QR コードを読み込むことで、手元のスマートフォン等の画面上ですべてのポスター内容を閲覧できるようにした。

また、「Shinjuku Public Place Chronicle」では、コンテンツである歴史的な史料や映像は屋外空間で展示するのは難しいと判断し、55HIROBA そのものではなく、隣接する新宿三井ビルディングの 2 階ロビーのラウンジスペース 55SQUARE south を展示空間として活用することになった。新宿三井ビルディングでは、近年、低層部のありかたについての検討が進められ、従来のロビー部分をラウンジ、コワーキングスペースにリノベーションするなど、超高層ビル街の足元に中間的公共空間を生み出す取り組みを行っていた。2 階ロビーのラウンジスペース 55SQUARE south ではスタンディング形式で利用するロングテーブルが二台、設置されていたが、「Shinjuku Public Place Chronicle」ではそのロングテーブルの細長い形状を活かし、年譜形式でのパネルを作成し、テーブル表面にはめ込むこととした。加えて、テーブル周辺の壁面に映像を投影し、さらに天井からは、55HIROBA や新宿駅周辺の広場の計画・設計に関わった人物が遺した



写真2 Shinjuku Public Place Chronicleの展示風景

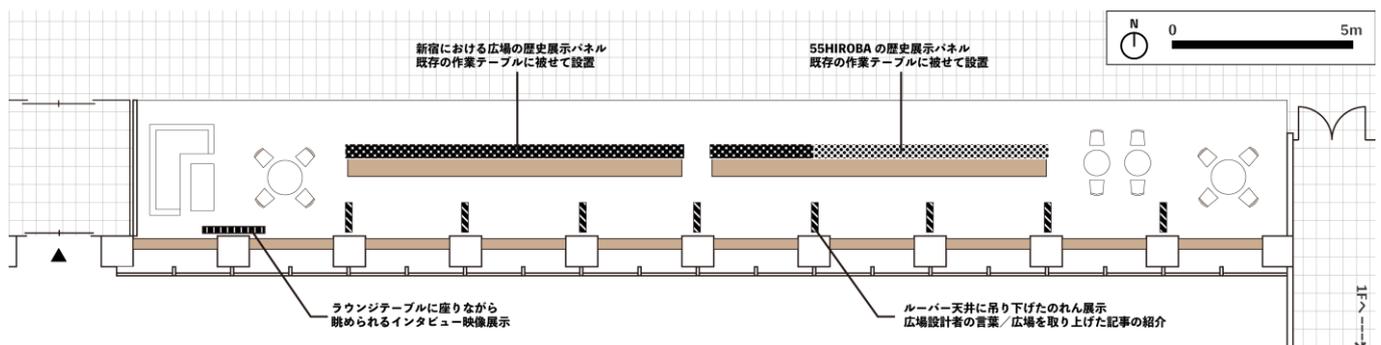


図5 Shinjuku Public Place Chronicleの展示平面図



写真3 Place Making Exhibitionの展示風景



写真4 Place Talk (2018年9月23日)の実施風景

計画・設計意図に関する言葉を付したフラッグをつるした。何れも、ロングテーブルの日常利用を妨げないように注意して、展示位置を決定した(図5、写真2)。

3.2 展覧会自体に組み込まれた広場を生み出すプログラム

UPE2018では、これまでに生み出されてきた都市計画遺産としての広場ストックについて、その活用・再生という観点も展示に含めることにした。具体的には、東京都内4カ所で実施された空間の暫定利用・社会実験で実際に使われた空間創出ツール、ファニチャーを展示品として配置する「Place Making Exhibition」であった。都市空間の日常使いを損なわない展示を追求する一方で、現在の広場を生み出す取り組みを効果的に展示するためには、この展覧会自体が広場を生み出している、広場創出の実践となっていることが求められた。そこで、「Place Making Exhibition」では、55HIROBAを見下ろす位置に設置されている歩行者専用デッキを展示場所とすることにした。このデッキは日常的にはあまり歩行者通行量の多くない空間であった。ここに各地の社会実験で実際に使われたベンチやパラソル付きの自転車を並べることで、この空間の使い方の可能性を示すこととした。つまり「Place Making Exhibition」自体を既存の都市空間ストックを活用した広場創出の最新の取り組みを実践的に提示するものとしてデザインしたのである(写真3)。

また、UPE2018では、4回にわたるトークイベント「Place Talk」

を実施した。企画者が登壇した「アーバンイズム・プレイス・レセプション」(9月15日)、日本設計で新宿三井ビルディングの設計を担当したチームのメンバーによる55HIROBA創出に関する貴重な証言の場となった「新宿三井ビル・55HIROBAの誕生と再生」(9月18日)、新宿西口超高層ビル街全体の公共空間の今後について議論した「新宿からの都市の広場論」(9月21日)、新宿西口的话题をこれからの都市計画のありかたにまで展開させた「広場を楽しむ都市計画へ」(9月23日、写真4)である。55HIROBAの中で少し高い位置にあるステージ部分で、しかし周囲に対してはオープンなカタチで開催されたこれらのイベントでは、必ずしもトークを聞きに来たオーディエンスだけでなく、周りのテーブルに座った人々を巻き込むことを意図した。つまり、トーク開催時も日常の広場利用が継続されると同時に、議論や討議の場という広場の性格を強めるようなプログラムを展覧会の中に組み込んだのである。

4. 展覧会来場者の評価傾向

4.1 会期中の来場者数

会期中の来場者数は表1に示したとおりである。「Great Public Places since 1919」については実際にポスターを見たかどうかは判断ができないため、30分毎に計測した着席者数で来場者数を代替した。また、会期中、9月20日、21日は雨天であったため、「Place Making Exhibition」は展示をとりやめた。

4.2 展示に対する来場者の評価傾向

「Shinjuku Public Place Chronicle」来場者および「Place Talk」参加者にアンケートを実施し、参加者の属性や評価傾向を把握した(有効回答数133)。属性については、性別、年齢(年代)、建築・都市計画に関する専門性を把握した。展覧会の評価については、4つの企画それぞれについての満足度に関する5段階評価と、展覧会全体の評価についての「都市計画史研究の4つの理念型」⁽⁴⁾を応用した期待される4つの効果(図6)に関する5段階評価を実施した。都市・建築関係の専門家と非専門家のそれぞれの評価点の差分から、都市・建築関係の専門性の有無による評価傾向の違いについて考察を行うこととした(表3)。

各企画の評価については、日常利用と併存しているものの、日常利用者数が必ずしも多くなく、落ち着いて展示を鑑賞することができた「Shinjuku Public Place Chronicle」、ステージやデッキなど周囲からは切り離された会場で、トークに集中して耳を傾けることができた「Place Talk」の満足度が、他の2つの企画に比べて高

	専門家 都市計画(史)研究者	都市計画実務者	非専門家 一般市民
手段的知識	プロフェッショナル都市計画史 都市計画の歴史について新たな知識を得ることができた	ポリシー都市計画史 都市計画のこれからに役立つ知見を得ることができた	
	クリティカル都市計画史 都市計画とは何かについて改めて考えさせられた	ハブリック都市計画史 身の回りの都市空間や場所についての見方が変わった	
反省的知識			

図6 「都市計画史研究の4つの理念型」に基づくアーバンイズム・プレイス展2018に期待される4つの効用

表3 アーバニズム・プレイス展 2018 におけるアンケートの回答結果

個別展示の評価	Great Public Places	Shinjuku Public Place Chronicle	Place Making Exhibition	Place Talk
	平均値 (1非常に面白かった 2面白かった 3普通 4退屈であった 5非常に退屈であった)			
全体(133)	1.92	1.59	2.13	1.46
a1 都市・建築関係の専門家(106)	1.93	1.55	2.16	1.52
a2 上記以外(27)	2.00	1.79	2.18	1.27
差分(a2-a1)	0.07	0.24	0.02	-0.24
展覧会全体の評価	都市計画の歴史について新たな知識を得ることができた	都市計画のこれからの役立つ知見を得ることができた	都市計画とは何かについて改めて考えさせられた	身の回りの都市空間や場所についての見方が変わった
	平均値 (1はい 2 3どちらとも言えない 4 5いいえ)			
全体(133)	1.50	1.66	1.63	1.85
b1 都市・建築関係の専門家(106)	1.52	1.62	1.62	1.89
b2 上記以外(27)	1.52	1.85	1.70	1.70
差分(b2-b1)	0.00	0.23	0.08	-0.18

い満足度であった。一方で、都市・建築関係の専門性の有無で評価が大きく異なる傾向が見られたのも「Shinjuku Public Place Chronicle」と「Place Talk」であった。前者は図面資料や建築家・都市計画家の言葉で新宿の広場の歴史を詳細に解説する内容であり、専門性のある人たちからの評価が高かった。一方で、後者はトークという性質上、展示よりも内容が理解しやすいこともあって、専門家でない人たちからの評価が高いという傾向がみられた。UPE2018 全体については、「都市計画の歴史について新たな知識を得ることができた」という評価が「身の回りの都市空間や場所についての見方が変わった」評価を大きく上回った。しかし、属性でみると、都市・建築関係の専門性の有無で評価が異なった。専門家が「都市計画のこれからの役立つ知見を得ることができた」点を評価したのに対して、非専門家は「身の回りの都市空間や場所についての見方が変わった」点を評価する傾向が見られた。

5. おわりに

以上のように、UPE2018 は、都市計画遺産という概念を中心に据え、広場に着目した展覧会であった。実際に都市計画遺産である広場が体感できるよう、新宿三井ビルディングの55HIROBAを会場として選定した。また、コンテンツとして日本の広場、新宿の広場、広場を生み出す現代的手法、そして広場をめぐるトークを用意したが、それらを1)場の日常的な空間利用の中に織り込まれた展示、2)展覧会自体が広場を生み出すという原則のもとで、具体的な展示箇所や展示方法を検討してみたのである。

UPE2018 では、都市計画遺産を体感する、日常的な空間利用を維持しつつ展示を行うという考えのもとで展示を行った。しかし、日常利用を担保した企画は日常利用を意識する必要のない企画に比べて来場者の満足度が低くなる傾向が見られた。日常利用が維持されているがゆえに、展示物を見ることが難しくなるという事態に対しては、Instagramによる補完を実施したが、その効果は明確には把握できなかった。展示方法については改良を検討する必要がある。

また、都市・建築関係の非専門家に対して、他企画よりもトーク形式の企画が有効であるという評価傾向が確認されたことは、今後の同様の展覧会を企画する際の参考となろう。都市計画展覧会が有する効用は、建築・都市関係の専門家に対しては都市計画に直接役に立つ知見として効いてくるのに対して、非専門家に対しては、身の回りの都市空間に対する認識の変化に関わる効用がより大きいこ

とも確認できた。専門家、非専門家それぞれのこうした評価傾向を踏まえて、展示デザインを行っていく必要性が示唆されたのである。

注

- (1)主催は公益社団法人日本都市計画学会都市計画法 50年・100年特別企画委員会+認定特定非営利活動法人日本都市計画家協会アーバニズム・プレイス展プロジェクトチームである。チームメンバーは本稿執筆者8名に、高鍋剛(都市環境研究所)、中島伸(東京都市大学)、西成典久(香川大学)を加えた11名である。全体協力:三井不動産株式会社、三井不動産ビルマネジメント株式会社、資料協力:株式会社日本設計、新宿新都心開発協議会、運営協力:東京大学都市デザイン研究室、東京大学空間計画研究室、法政大学杉崎ゼミという体制で実施した。なお、アーバニズム・プレイス展 2018の展示内容については、日本都市計画学会学会誌『都市計画』338号、2019年5月で一部報告済みであるが、本稿では展示デザイン、および来場者評価傾向に関するより正確なデータの整理、追加の分析を行っている。
- (2)都市計画遺産研究会の研究会趣旨より。
- (3)プログラム「アメリカの偉大な場所(Great Places in America)」については、参考文献3)を参照した。
- (4)「都市計画史研究の4つの理念型」については、参考文献4)を参照した。

参考文献

- 1) 秋元せき、「1920年代京都における都市計画展覧会の歴史的意義—都市計画にみる歴史意識」、人文学報、(98)、pp.297-325、2009
- 2) Robert Freestone and Marco Amati ed., *Exhibitions and the Development of Modern Planning Culture*, Ashgate, 2014
- 3) 中島直人・津々見崇・佐野浩祥・初田香成・西成典久・中野茂夫、「米国および豪州における「都市計画遺産」選定に関する近年の取り組み」、日本建築学会技術報告集、21巻48号、pp.795-800、2015
- 4) 中島直人、『都市計画の思想と場所—日本近現代都市計画史ノート』、東京大学出版社、2018

謝辞

アーバニズム・プレイス展 2018 開催にあたっては、三井不動産株式会社、三井不動産ビルマネジメント株式会社、株式会社日本設計、新宿新都心開発協議会に多大なご協力を頂いた。ここに感謝の意を表します。なお、本研究は JSPS 科研費 JP 18H01603 の助成を受けたものです。

[2019年10月2日原稿受理 2019年11月5日採用決定]